特集・転換期の福祉行政

寿ドヤ街の福祉対策について

谷川 弘
田中俊男

1――――「寿」ドヤ街概況

82軒の旅館<アパート化したものを含む>，総ヘヤ数5,100余。30代を中心とする4,500～4,700人の男子労働者。家族を含めて6,400人のドヤ人口。「寿」は日雇労働者の「居住地」，日雇労働力の「取引市場」という二重の機能をあわせ持つ。日雇労働力の給源として，港湾・土建からの臨時日雇労働力の需要にこたえて寿ドヤ街が成立している。このことを最も基本的なこととしておさえておきたい。

2――――「寿」の貧困

1・貧しいサイフ

「日雇賃金」は高いというのは誤解である。㋑2,200～2,300円×21～22日，年収58万円。㋺社会保険・年金・福利厚生施設等，年間，あるいは生涯を通じて受けとる「みえざる所得」からほぼ完全にしめ出されている。㋩法外なヘヤ代，外食依存などからくるドヤ生活のコスト高――総体としての所得水準は，「世代の順当な再生産」を不可能とするレベルにある。生活上の事故をカバーするものは公的扶助しかない。保護率は1,000分の100をこす。

2・磨滅していく「人間」

日雇はだらしがない。カネがある間は働らかず，仕事の現場ではおざなりで無責任，といったことをよく聞く。

私は「立ちん棒」にまぎれて2度「にわか日雇」をやってみた。大部分「寿」と野毛の日雇からなる15人編成の浪人組，二度めは，「寿」の10人の日雇とともに，25人編成の大ギャングに組みこまれた。

チーム作業を中心とする港湾労働は，全体として単純労働でもなさそうだ。段取りをつけ，用具をこなし，呼吸を合わせて荷役は進む。経験と工夫を働らかせ，仲間と力を合わせてひとつの仕事をやりとげるところによろこびもある。しかし，日雇諸氏は，「同僚」の名前も知らず，互いにバラバラに切離されて黙々と働く。仕事を教えてくれる人もいなければ，段取りを話合うこともない。冗談もめったに出ない。「オイ！　そこの！<誰それ，とよんでいるのだ。>バールをとってくれ！」。それは誠に奇妙なチーム作業であった。すべての労働は大なり小なり人間を疎外する。しかしそれ故にこそひとはそのなかに知恵と技能を持ちこみ，協同することによって，「人間の価値」を労働のなかに生かそうと試みる。部分的にでも疎外を克服せんとする。しかし日雇労働者にその枠はあまりにも狭い。彼らは，はじめから期待されていないことを知っている。ひたすらに時間が来るのを待ち，ケガをしないように気を配って最後に確実にペイを受けとればよいのだ。仕事を終えて本船を去るときに，「俺達のおかげでこの船も無事出帆だ。安全に航海してまたおいで」といった誇らしさ，満足感を味わうゆとりはあるまい。あすはどこの仕事かわからない。港湾労働者としての誇りよりも「風太郎」，「流れ者」といった意識がやきついていくのはさけがたい。人間の価値やよろこびを持ちこむことをやんわりと拒否する日雇労働の残酷さを人は知るべきである。つかれたからだとやりきれないわびしさは，「寿」の酒場でつかの間のやすらぎをうる。食堂でひとり一パイ傾けている労働者によくつかまる。「悲しいんだよ。…」。「アンタには関係ないんだけど聞いてくれ…」。そしてなぐさめのはずのアルコールは，しばしば労働者の身心に致命的な打撃をあたえるのだ。

労働者からサイフを奪い，気力と技能を奪い，ついには肉体までも奪い去るもの，自己の人生と，地域社会，全体社会への愛着と責任感を奪い去るもの，万量の重みを持つはずの人間の尊厳を冒瀆するもの――それが日雇労働だ。

表1――世帯類型別登録数

	世帯数	世帯人員		
		男	女	計
単身世帯	503	460	43	503
複数 〃	334	595	581	1,076
計	837	1,055	624	1,679

43.10 15現在，中区役所住民登録台帳による。

からだをひどくいためながら，なおも飲んだくれる労働者と私達は生活館の窓口でどなりあう。「寿」ドヤを生み，「寿」の労働者の肉体と魂を奪っていく日雇労働の非人間性を，いま，私達は告発したい。

3――――ドヤ生活の非人間性<イエが作れない>

1・はじめに「ドヤ街は……」

「寿」は外形的にはドヤの町だ。喧騒をきわめる朝夕のこの町が真昼の静けさに沈むとき，この町はかえってあだ名のように“西部の町”の茫漠とした空白感を私達に感じさせる。そこに“生活”がない！村の中で，裏町で，公団のアパートで，そこに住む人間の生活は“オレのウチ”，“アタシのイエ”という建物に形象化する。そして建物は大地と融和して，村や町や団地を作る。人間の生活がその土地の“景観”となる。「寿」にはそれがない。人は建物になじまず，人々がさまざまな思いをこめてかたる“イエ”が，ただの容れ物として人間存在に対立している。そしてその建物は異形のもののように大地に突っ立っているのだ。ドヤ街のもつ非人間性を私達ははっきりとつ

かまえなければならない。

2・「ドヤ街を作ったのは誰か」＜なぜドヤに住まなければならないか＞

日雇労働は，二つの点で原理的に労働者の定住を困難にする。まず第一に，収入が安定せず将来の保証がない。また一時にまとまったカネがえられない。第二に，就労場所が一定しない。この，日雇労働そのもののなかに内在する条件によって日雇労働者は，“ドヤ的な住生活”すなわち，定住性のない住生活を強制される存在であった。その彼らが，総体として“ドヤ街”に住まなければならなくなったのは，つぎのような理由による。

日雇労働者は原則として一日ごとに就労契約を結ぶ。だから彼らはつねに仕事をうる契機に近接していなければならない。この契約は，青空労働市場に近接して住むことと，労働者同志の面識による手づるによって日常的に可能となる。そしてこれらのことを現実的に可能にするものとして生まれてきたのがドヤ街なのである。

「寿」は，第一章「概況」にみたとおり，町自体のなかに，山谷，釜ケ崎と同様，大きな青空労働市場を持つ。そして横浜のもう一つの大労働市場である野毛まで歩いて20分の距離にある。また，一般の日雇労働をあっせんする港労働職安が寿町にあり，港湾日雇をあっせんするその万国橋分室は，「寿」から歩いて20分の距りにある。このことは，もし仮りに労働の取引市場が「寿」に近接した地域からなくなったら，場所としての「寿」ドヤ街は衰退するであろうことを予測させる。

日雇労働者は，お寺や公園に群って巣をつくる鳩のようなものだ。彼らは仕事という名の豆をえやすい所に群居し，また群居することによってさらにえやすい条件を作り出す。しかしながら，豆をもらえるかどうかは，あたえる側の一方的な都合によって左右される。「ドヤを作ったのは日雇労働という制度だ！」，そして，日雇労働者とその雇用者の相互の便宜のために，ドヤ街が“生まれてきた”。注意しなければならないのは，この，生まれてきたということだ。ホワイトカラーのサラリーマンのためには大規模な団地がいくつも作られている。常用労働者には不十分ながら，寮や社宅がある。しかし，日雇労働者には，生まれてきたドヤ街しかない。日雇労働者のための住宅政策は遅れているのではない。それは“ない”のだ。あるのは，日雇労働を脱出することを前提とした個人的なドヤからの離脱にすぎない。

3・「私はこのスペースを今日300円で借りた」＜居住権のないこと＞

“ドヤ”は建物であると同時に，制度である。この制度は二つの一般的な概念，すなわち，“住む”ということと，“泊る”ということの本来的なあり方をないまぜにし，その両方のもっている特徴を，経営者に有利な方面からのみ適用するという制度である。

ドヤは旅館業法にしたがって経営されている。これとても，正式に許可をえていないものが多いのであるが，それでもたてまえは旅館である。それはつぎのような旅館らしい特徴をもっている。

①部屋代＜ドヤ銭＞が原則として日払いである。

②からだ一つで行っても泊まることができる。その最低の条件は，フトンが用意されていることであるが，まさにその最低を上まわるものは寿の場合何もないといってよい。枕もシーツもないのが普通である。そしてまたこの最低の条件も実はまやかしなのであって，フトンは部屋に付属したものではなくて，部屋というスペースとは別個に料金をとって宿泊者に貸すものなのである。従ってフトンを借りなければそれだけ安いし，余計に借りればそれだけ高い。旅館は自分でフトンをもっているのではない。なんのことはない，貸ブトン

屋からフトンを大量に借りてきて，宿泊者に又貸ししているのである。

上の二つのことは，旅館というタテマエから生まれることで，そのタテマエを認めたうえでは，通常の観念からする旅館とは内容的に天と地との差があるとしても，またいろいろなまやかしがあるとしても，一応是認すべきものである。しかしながら，ドヤに生活することの惨めさは，実はドヤは住居ではないという，いわば負のタテマエによって，決定づけられていることを見落としてはならない。二つの旅館らしい特徴は実は裏返しになって，宿泊者に鋭く突きつけられてくる。部屋代が日払いであるということは，現実にはつぎのようなことを結果する。

＜イ＞泊まるという契約が一日ずつ繰り返されるわけであるから，原理的に居住の継続性が保証されていない。

＜ロ＞日払いの旅館代金としては一見高くないように思えても，長期間で計算すると，アパートなどとくらべて途方もなく高くつく。

第一の点は具体的には次のような内容をもつ。

表2——寿ドヤ街＜広義＞の旅館数とヘヤ数

構造区分	旅館数(1)		数ヘヤ数(2)	
木造2階建て	10	〈6〉	215	〈119〉
〃 3階 〃	13	〈11〉	582	〈405〉
〃 4階 〃	11	〈10〉	709	〈633〉
小計	34	〈27〉	1,506	〈1,157〉
鉄筋コンクリート構造	48	〈47〉	3,648	〈3,613〉
計	82	〈74〉	5,154	〈4,770〉

＜注＞(1) 旅館数は，43年10月末日現在，アパート化したもの4を含めた。
＜ ＞内は，「狭義の意味での寿」区域内にあるもの。
＜注＞(2) ヘヤ数は，43.7.10伊勢佐木署調査，42. 7 1社大調査，43 7寿生活館調査による。

①宿泊者の経済状態の日々の凹凸がそのまま住生活を不安定にする。ドヤ生活をする日雇労働者にとっては，明日の食の心配とほぼ同程度に，あすの住の心配がある。

②宿泊者の生活のありよう，管理人や隣人達との人間関係等によって，全く不意に泊めてもらえなくなることもありうる。＜酒を飲んで騒ぐ，うるさいなどという理由で追い出されることがしばしばあるが，少し声を大きくすれば隣近所に迷惑がかからざるをえないようなドヤの構造自体にも問題がある。＞

③経済的な居住が保証されない以上，その部屋に自分が住みやすいように手をくわえることが困難であるし，またその気になれない。

④自分の住んでいる場所に愛着がわかない＜愛着がもてないのは，ドヤの部屋が無個性でノッペリしていることにもよる。そこには陰影や発見がなく，畳と壁に包囲された人間をいれる箱だとの印象がある。天井が非常に低いことがこの感じをさらに強める。つねに天井を意識する生活の圧迫感を想起すべきである。＞

ドヤは住居ではないのだから経営者と宿泊人の間には長期の契約関係はない。したがって宿泊人は経営者にたいして無権利である。また権利がないのだから，そのスペースにたいする所有感，帰属感がおこらない。したがって，愛着ももてない。

ドヤが旅館であるというタテマエによって，法外な住宅費を住民から奪っていることを私達は最大のまやかしと考える。3畳の部屋を毎日300円で借りれば，1カ月にして9,000円の部屋代になることを考えれば，その法外ぶりはあきらかであろう。

日雇労働という制度が，日雇労働者達を総体としてドヤ街へと誘導した。そして今度は，ドヤ制度は，日雇労働の不安定性を住生活の面で全く鏡のように映し出す制度として生まれたために，日雇労働者の生活に「今日は金はなくても住むところだけはある」という，いわばクッションの役割を果たすどころか，ドヤは住居ではないというタテマエによって住生活の不安定性をさらに固定化し

た。

4・「部屋には何もない」＜ドヤは単なるスペース＞

前項で，ドヤは旅館らしい二つの特徴をもっており，その一つである日払い制度が，住民から居住権をはく奪し，高額な住居費をしぼりとるという働きをもっていることをのべた。もう一つの特徴は，「からだ一つで行っても泊まることができる」ということであった。しかしこのこともうら返されて「からだ一つの人間を泊める場所であればよい」という現実になっている。

寿町のドヤは原則として2畳または3畳である。このスペースで2人以上の人間が生活することは常識では不可能のように思えるが，3畳で最高8人が生活している例があり，4人5人はそう珍しくないのである。ドヤの3畳のもつきびしさは，それが3畳1部屋で自己完結しているということのなかにもある。それは台所に続く3畳でもなければ，隣りの6畳に続く3畳でもない。両側からそそり立つ壁の間の3畳であり，入口と窓が1つしかない3畳なのだ。私達はこれに似たものとして，警察の独房しか想像できない。

旅館というタテマエをもつドヤの部屋は，最低限寝る場所でしかない。そして寿町の場合，それ以上のものでは決してない。だからそれは住居としての部屋＜または家＞が通常もっているつぎのようなものをもっていない。

①押し入れがない＜昼間はフトンを部屋の一隅に積み重ねて生活することを意味する＞

②電気のコンセントがない＜一般に電気器具を使用するさいにはべつに料金がとられる。また電気光熱器具は使用を禁止されている場合が多い。多くの旅館ではコンセントがないので電灯から電源をとる。旅館というタテマエをとりながらも電気を任意に使うことを制限し，または現実に電気代をとっているところにもまやかしがある。＞

③水道，ガスがない。＜水道は共同使用である。またガスについては部屋に引かれていないのはもちろん，ほとんどの旅館に管が入っていない＞

④便所がない。＜共同使用であるが，不潔で数が少ない＞

これらの設備がないということは，そこが生活の場としてなりたちにくいことを意味する。私達が思い浮かべるイエは寝る場所ではないはずだ。それは母が立ち働く台所であり，勉強机の上の電気スタンドの灯りであり，押し入れのなかにしまってある数々のものである。そういったものの総体が“ワタシのウチ”なのであろう。そういったものとして私達はそこに，なつかしさや親しみを感じ，そこに帰属する。

ドヤの部屋には生活するための設備がない。日雇労働に従事することによってドヤに住まざるをえなくなった日雇労働者達は，住居の安定性を失うことによって自分のイエを喪失した。そしてさらに，そこが生活の場として成りたちにくいことによっても，自分のイエを喪失している。彼らはイエを二重に喪失している。

5・おわりに……「何が欠けているのか」

日雇労働者はドヤ街の住人である。しかしながらドヤは，それが旅館であるというタテマエによって住民に居住権をあたえず，またそこで生活するにたりる設備をまったく省略してしまった。したがって人々は，ドヤ街という空間に介在してはいるが，真の意味での住民になることを困難にさせられている。

ドヤ街に生活するということの非人間性は，そこでは「オレのウチ」「アタシのヘヤ」が空虚な内容しかもてないなかで，労働の疲れをいやさなければならないこと，また家族としての，人間同志としての関係を結ばなければならないこと，そし

て私達の文化がそのようななかで子供達に受けつがれてゆく<あるいは受けつがせられない>ということであろう。

ドヤ街の労働者はよく酒を飲む。一日のはげしい肉体労働のあとにまっているものが，今日一日借りうけた人間を入れる箱でしかないことを知るとき，彼らは酒を飲んで寝るときをまつ。酒をのめば少しでも人間らしい話しができるかもしれない。彼らの多くは稼いだ金を酒を飲むことによって使いはたす。それは私達サラリーマンが"たまには飲もうか"といって飲む酒とは種類が違う。私達は日常性から離れたところで酒を飲み，そして解放される。彼らは日常的に飲む。意識するとしないとにかかわらず，ケンメイに飲む。現在の自分のありようを維持しようとして飲む。だが彼らは酒を飲むことによって，日雇労働者，ドヤ居住者としての彼らの現在をすら，内部からむしばんでゆく。日雇労働者→ドヤ居住→酒→廃人→死という一定進路を，現在を無意識的に防衛しようとしながら，かんまんに，しかし確実な足どりで一歩一歩歩いてゆく彼らの群像をわれわれはドヤ街に発見する。ドヤ街ではそうした彼らの実像と叫びと残映とが，うず高くつみあがり，うごめき，むなしく消えてゆく。

私達は告発しなければならない。「誰がこうしたのだ……？」「何が欠けているのか……？」と。そのはじめにおいて，日雇労働者になることを，ドヤの住人になることを，廃人になって空しく死ぬことを誰も望みはしなかった。日雇労働という制度を作りだしたのは誰だ。ドヤ街を作りだしたのは誰だ。それらを放置しておいたのは誰だ。

繁栄する日本の貿易を港湾労働においてささえ，はなやかな近代建築を土台においてささえた彼ら労働者の声なきうめきから，一体誰が免罪されるというのだろうか。

4――――住民とともに考える対策

1・底辺からの住民自治

「寿」には，いまひとつの素晴らしい夢がある。社会から取り残されてまどろんでいる人々と町に今からなにか新しいことが起こりうるという望みがある。外見上の大都市発展のかげに，「人間」が，最も残酷に押しつぶされ，最も完璧に脱政治化せしめられているがゆえに，そこには原点に立ち返っての，底辺からの人間回復，底辺からの民主主義，底辺からの住民自治を実現しうる素晴らしい期待と，その現実的な可能がある。

第一に私達は，「人間」としては，さしあたり82軒の旅館の住人に限定して接触をはかればよい。しかもこの人達のあいだには，大なり小なり疎外された者同志，からだひとつの肉体労働者仲間という，暗黙の連帯感情があり，またよいことにたいしては率直に共感をしめす純な心がある。第二に，「狭義の意味における寿」のもつ，コンパクト性，モノ的性格は，いくつかの重点政策をきわめて効果的たらしむる要素である。

ともあれ「寿」は，人ぐるみ，町ぐるみ，変わりうる可能性を秘めている。町の労働者のひとりひとりが，みずからのあすを考え，これとの関連において，地域の未来をつくるための責任ある「参加」を実現していく――底辺からの人間回復，底辺からの住民自治とはこのような意味を持つ。すべての「対策」は，この理念を実現する過程であり，かつ，その結果でなければならない。もし，町ぐるみの移転が考えられるのであれば，住民全体に問うがよい。そのことの可否，その方法について，住民自身のなかににぎやかな討論がまきおこるであろう。その時彼らは社会に「参加」し始める。オレ達ハドウナル……。不安と期待が渦まくなかで人々は「あす」を思う。オープンの話合いのなかで，誰しもが納得するところに大勢はお

もむく。行政の側に誠意と自信があれば，落ちつくところに落ちつく。

「住民」と「行政」とが一方通行の関係に終始することがある。「行政」が絶対的な主役で「住民」は上からあたえられるサービスを単に享受するにとどまる場合，あるいは逆に「住民」は近視眼的な要求をかかげ，「行政」は逃げ腰でせいぜい譲歩するにとどまる場合がこれである。いずれも不毛な関係といわざるをえず，真の住民自治とは無縁であろう。「住民の意見をくみあげて」というとき，このような関係を美化するにすぎない場合がある。両者は，「ともに考え，ともに実行していく」関係にありたい。

人間の福祉＜Welfare＝よき生活＞というのは，単に物質的に快適な状態をさすのではなく，人々が「あす」を思い，その「あす」のために力をかしあうなかで「人間の価値」を実現していくところにある。寿ドヤ街の福祉対策の基本理念もここにある。

2・国の責任＜労働政策と住宅政策＞

私達がくり返しのべてきたように，問題の所在はすでにハッキリしている。労働政策と住宅政策がドヤ対策の2大支柱である。この二つが強くおし進められればことばの通常の意味における「福祉事業」の領域は大幅にせばまり，きめこまかな対策も可能となろう。

地方自治体は，考える住民，「参加」する住民をバックに強く国の責任を問うべきである。東京，大阪など，悩める他都市とも緊密な連携を保つ必要がある。

現代のドヤは，都市化現象の「結果」ではなく，大都市発展に不可欠の「生産要素」なのだ。「寿」の労働者の汗と涙とついには肉体と魂までも吸いとりながら，横浜の港が発展し，道路が伸び，団地が作られてきた。今後も当分続くであろう。人間を使い古し，ダメにしたあとで「スラムクリアランスの問題」というのは許されない。

①日雇労働者に健康保険を

日雇健保があると人はいう。労働者自身が手続をいとい，負担金を払うのをケチルからだと人はいう。しかし，ヤミで「寿」から人を集め，そうでなくとも面倒で負担金もバカにならないためにサボッテいる業者の存在はどうなるのであろうか。職安ルートを介しない日雇は，親方にイヤな顔をされるのを恐れる。うつ手がないとは思えない。労働者は職安登録をしていなくとも日雇健保は作れることをしばしば知らない。

②「寿」の町からヤミ雇用を一掃してほしい。

企業の求人連絡員による合法的な直接雇用といえども極力職安ルートを経由さすべきである。「青空取引」が日雇労働者を結局は無権利の状態に追いこんでいるのだ。少なくとも港湾労働法16条の完全実施はやってほしい。

③建設労働法の制定を

前にみたように，昨年末を境に，寿生活館の相談件数で，土建が港湾を上まわるにいたった。「寿」で土建労働者の数がふえたのか，あるいは問題の「質」が土建において深刻になってきたのか，まだ分析の根拠をもたないが，「寿」の問題として土建労働の前近代性が大きな暗雲として立ちはだかりつつある。

④日雇労働者の住宅を

国の産業において日雇労働者が一定数は必要なら彼らにも「イエ」をあたえよ。仕事を失う心配のないよう，労働政策との関連でなければ「寿」への対策にならない。

3・業者の「参加」を求める

①企業の責任

「寿」の労働者を雇用している業者は，「寿」の人々と町の運命について「ともに考え」対策にも

実質的に「参加」すべきである。社会保険や退職金，住宅・福利厚生費等の負担を免れている業界が，「ドヤの問題は国や県市の問題」と逃げることを許してはならない。「寿」から，たとえば年間のべ1,000人以上の労働者を使っている企業およびその団体は，一定金額をプールして「寿」の労働者のための対策費にあてるべきである。

②旅館業者の社会的責任

旅館組合と宿泊者と市の三者が話し合うなかで，それぞれの責任の範囲をハッキリさせなければならない。業者は市へ公衆浴場の設置を要請しているが，旅館自体の設備の不備，はては違反建築はどうなのか。宿泊費の高額なことはどうなのか。

4・市の責任

これまでにのべてきたことがらが具体的にひとつひとつ進行するように，強力なイニシヤチブをとっていかなければ，寿ドヤ街の「問題」は解決しない。国を動かし，県を動かし，業者をひっぱり出すこと，必要な資金はそのなかから負担し合うこと，このようなダイナミックな動きをつくり出すために，強力なイニシャチブをとること——これが市の責任である。

最後に，市が独自にやれることとして，つぎの三つを重点的に提言したい。

①寿生活館を住民組織化のために活用しよう

生活館の役割を，従来の個別的な「難儀うけたまわり所」的なものから，積極的なコミュニティーオーガニゼーションの機関へ重点を移すべき時期にきていると思う。創館以来3年半の住民との接触を通して，その土台もある程度作られてきたと思われる。

この夏，「寿」の小学生二人が信じられないような窃盗事件で補導された。私達がそれぞれの両親を訪ねたところ，「全く手をやいています。どこか施設へぶっこんで下さい」と嘆く。しかしこの子らを施設へ入れてもつぎつぎに問題児が出る可能性がこの町にはあるのだ。町ぐるみ，少なくとも悩める親同志だけなりと，相互に協力し合う体制を作らなければならない。住民組織化の第一歩は，たとえばこのようなところにもあろう。

それには，㋑生活館の恒常的な夕方開館，㋺そのための人員増が必要である。包括的な，町ぐるみの問題に積極的に加わりうる労働者と接触できるのは，彼らが仕事から帰って来る夕方6時以降である。

②夜間銀行をつくろう

住民のニードは圧倒的である。「寿しんぶん」がアンケートを実施中で，「ぜひ欲しい」と「あった方がよい」がほぼ同数，両者合わせて9割をこすとのこと。同じアンケートで，約4割の人が，今でも「貯金をしている」と答えたという。ちなみに釜ケ崎では37年から，山谷では41年からすでに実施中で，釜ケ崎の場合，この夏，口座数2万余（釜ケ崎の人口は約2万人と推定されている），預金残高7,000万円を越し，年内にも1億円に達するのではないかといわれている。

さらに，自分の「あす」を思う人は，地域全体の「あす」を考えうる人であると私達は期待してよいのではあるまいか。

③目的的な調査を

あまりにもいい古されたことばだが，私達も今これを提言したい。具体的には，㋑住民全体の階層構造㋺居住年限と移動のパターン，この二つは住民組織化の前提でもある。㋩「寿」をめぐる日雇労働者の就労経路，これは労働，住宅政策の基本資料であり，企業の名前まであげて，ドヤ対策へ産業の「参加」を求める資料ともなろう。

<民生局寿生活館>